

職業興味と志望との関連性

戸田勝也

一 問題と目的

公共職業訓練、養成訓練課程における中途退学者が増加し、それが生活指導上の大きな問題になっている（戸田、一九七三年、倉橋・一九七八年）。この中退の原因は、訓練生の個性的要因、家庭環境的要因など多様であり、中退防止の手掛りはほとんど、つかめていない。

しかし、職業適性、知能など知的要因、および職業興味、性格など非知的要因と中退との関連を検討すると、職業興味が重要な役割を果していることが実証されている（戸田、一九七五年）。つまり、自分の学んでいる訓練職種に対する興味が低い訓練生は訓練途中で退学する傾向が強いのである。

このような事実がわかっているにもかかわらず、生活指導の訓練生理解に職業興味検査が用いられることが少ない。その理由は、従来、職業能力の形成に主眼がおかれ、職業興味の形成は問題にされなかった社会的風潮にもよる

が、職業興味そのものが明確に把握できないところにもその一因がある^②。というのは、既にある職業興味検査では、生産技能関係の訓練生の職業興味を測定するには、かならずしも充分とは言えなかった^③。そこで、新たに開発されたのが、「職業興味・志望診断検査」である（藤原・河井・戸田、一九七七年）。この検査における測定上の特長は職業興味の構造と興味の類似概念である職業志望の構造を明らかにして、その対応を検討して適切有効な情報を得ようとしたことである^④。

このような設定をした理由はつぎのごとくである。第一に、職業的発達に關与する要因として、個性的要因と社会的特性とがあるが、これらの個性的特性が職業選択に關与する度合は、成熟段階によって異なるという指摘である（Super, 1962, Nelson, 1955）。つまり、青年期の初期には主として興味とか能力に重点をおき、青年中期に達するにつれ、社会的評価とか価値観とかいう角度から見ようになり、後期には現実的な認識の下に職業選択をなすと言われる。このように、職業的に成熟にしたがって、個性的特性の關与の度合が変化することは注目に値する。さらに、O'hara & Tiedeman (1954) は、青年初期に比べて青年後期は客観的に自己評価することができるようになる^⑤と述べている。

第二に、Super & Overstreet (1960) が、職業的成熟の諸変数として、十八項目をあげ、興味と好み (preference) の要因を重視すると同時に「測定された興味」と興味類似概念との一致を成熟の目標としている。これは職業的成熟が心理構造の微妙なずれによって測定し得ることを示唆している。

第三に、興味と志望との関連を見る必要性について、藤原喜悅（一九六九年）は、従来の職業興味検査において、職業的アクティビィの好嫌を通じて職業群の興味を見るのは抽象的であり、自己の仕事として「する」こととは

相異なる面がでてくる、と指摘している。また、広井甫（一九六九年）は、「好きな職業とつきたい職業」とは直接的に結びつかないことを実証している⁷⁾。

このような要件を考察して、職業興味は情緒的側面が主となり、職業志望は意欲的側面、価値的側面を含むと想定して、興味と志望との関連を測定している。そして、具体的な測定では職業興味は職業活動に対する「すき」きらいVで反応を求め、職業志望は職業名に対する「なりたいたい」なりたくないVで反応を求めている。

その後の検討により、このような職業興味と志望との一致、不一致をみることに職業的成熟の指標になることがある程度実証されている。（松本公子、一九七六年、Marcham, 1975）

しかしながら、本検査作成過程で心配が残っていたのは、職業興味の下位項目が職業活動の文章であり、一方、職業志望の下位項目が職業名であり、両者ともに職業名を下位項目に用いたら、両者が重なってしまうのではないか、ということである。

そこで、本研究では、職業興味、志望ともに下位項目として職業名を用いて、養成訓練課程に在籍する男子訓練生において、学年進行にともなって、興味と志望との関連がどのように変化するかを検討することを目的とする。

なお、前段階として、調査対象者の興味傾向を同年齢層の高校生と比較し、また、年齢層の相違を大学生との比較で検討する。

二 調査方法

(1) 『職業興味・志望診断検査』でみた訓練生の興味傾向の調査手続

職業興味・志望診断検査の標準化作業段階で、職業訓練生、五七一名、高校生、一、二四七名、大学生、四八八名を対象として、同検査を実施した。そして、各群における興味・志望領域ごとに平均値・標準偏差を求め、各群間の平均値の差を検定した。

(2) 本調査の手続

調査票は、前記検査で設定した職業興味の一〇領域から、それぞれ適切な職業名を選定、六〇個の職業名を下位項目にした。被験者に同一の調査票を二枚配布し、一枚目にA欄の下位項目のうち、△すき▽なものに○印、B欄に△なりたい▽ものに○印をつけるように指示した。また、二枚目では、下位項目のうち、A欄に△きらい▽なものに×印、B欄に△なりたい▽ものに×印の記入を求めた。

調査対象者は、総合高等職業訓練校、二校を選び、男子訓練生、延五三二名を主にした。その内訳は、一年生(十

五歳)、二九一名、二年生(十六歳)、二四一名である。さらに、若干の高卒訓練生、訓大短期指導員課程生(成人)を含めた。

調査時期は、一九七五年六月である。

データの処理は、職業興味では、 \wedge すき \vee を三点、無印を二点、 \wedge きらい \vee を一点として計算し、志望では \wedge なりたい \vee を三点、無印を二点、 \wedge なりたくない \vee を一点として算出し、必要に応じて、平均値・標準偏差を求め、平均値の差を t 検定した。さらに、四分割相関係数も算出した。

三 調査結果

I // 職業興味・志望診断検査// でみた職業訓練生の興味・志望の位置づけ

本調査に入る前に、調査対象である職業訓練生の興味・志望の傾向を同年齢層の高校生群との比較で明らかにしておきたい。

表一は、「検査」での興味・志望領域ごとに各群の平均値・標準偏差を示したものである。

職業訓練生の職業興味領域は、訓練内容と関係の深い、「生産技術」が最も高く、次に、「戸外・自然」、「芸能・美術」が高い。逆に、興味の低い領域は「音楽」、「対人・社会」となっている。

表1 検査でみた訓練生の職業興味・志望

領域		対象群			訓練生 N = 571			高校生 N = 1247			大学生 N = 488		
		\bar{x}	S·D		\bar{x}	S·D		\bar{x}	S·D				
職業興味	1. 社会・奉仕	23.9	6.1		24.0	6.0		27.8	6.8	**			
	2. 対人・社会	22.6	5.7		22.6	5.7		28.3	6.4	**			
	3. 戸外・自然	29.7	6.9	**	28.4	6.7		29.4	7.3				
	4. 生産・技術	31.6	7.1	**	30.2	7.2		27.8	7.8	**			
	5. 科学・研究	25.1	7.4		25.4	7.3		32.4	7.8	**			
	6. 事務・書記	23.1	5.6		23.2	5.5		23.7	5.9				
	7. 販売・対人	23.8	6.1		23.4	5.8		21.9	6.2	**			
	8. 文芸・言語	23.2	6.4		23.9	6.7		31.6	7.8	**			
	9. 芸術・美術	28.8	7.5	*	27.8	7.3		31.6	7.7	**			
	10. 音楽	22.0	5.8		22.0	5.8		25.8	6.7	**			
職業志望	1. 福祉・看護	3.2	1.4	**	3.0	1.4		3.3	1.6				
	2A 司法・経理	14.1	5.5	**	15.2	5.9		19.7	6.6	**			
	2B 医療	8.5	2.8		8.5	2.9		9.8	3.3	**			
	2C 教職	10.1	3.9		10.0	3.9		14.3	4.2				
	3A 第一次産業	6.8	2.5		6.6	2.5		7.3	2.7	**			
	3B 運輸・保安	9.5	3.2		9.2	3.2		9.2	3.1				
	4A 技能	26.0	6.4	**	24.4	6.6		21.1	6.5	**			
	4B 技術	10.7	3.6		10.7	3.5		14.3	4.2	**			
	5. 学術研究	12.8	5.4		13.0	5.3		17.5	5.6	**			
	6. 事務	10.5	3.4		10.7	3.4		9.8	3.3	**			
	7A 商店	12.0	3.7	*	11.5	3.7		10.5	3.6	**			
	7B 個人サービス	4.6	1.9	*	4.4	1.9		4.0	1.7	**			
	7C 販売	8.8	2.9		8.7	2.9		7.8	2.7	**			
	8A マスコミ	6.8	2.6		7.0	2.7		9.1	2.9	**			
8B 文芸	6.0	2.7		6.3	2.8		9.1	3.2	**				
9A 美術工芸	7.3	3.3		7.1	3.1		9.1	3.7					
9B 芸能	9.3	3.5		9.2	3.5		10.0	3.7	**				
10. 音楽	5.9	2.7		5.9	2.7		7.6	3.1	**				

** P > 0.001

* P > 0.01

この傾向は同年齢段階の高校生群と比較すると、ほぼ類似の傾向を示している。しかし、訓練生群の平均値が高校生群のその値より、有意な差もって、高い興味領域は、「生産・技術」、「戸外・自然」である。また、職業志望では「技能」、「福祉・看護」で、訓練生群が高く、「司法・経理」領域で高校生群が高い傾向にある。その他の領域では、訓練生群と高校生群とはほぼ類似の傾向を示している。

さらに、訓練生群と大学生群との職業興味と志望とを比較すると、ほとんどの領域で両群間の平均値に有意差が認められる。そして、訓練生群の興味が高い領域は、「生産・技術」、「販売・対人」であり、逆に、大学生群の興味領域が高いのは、「科学・研究」、「対人・社会」、「文芸・言語」などの、いわゆる専門的職業に対するものである。

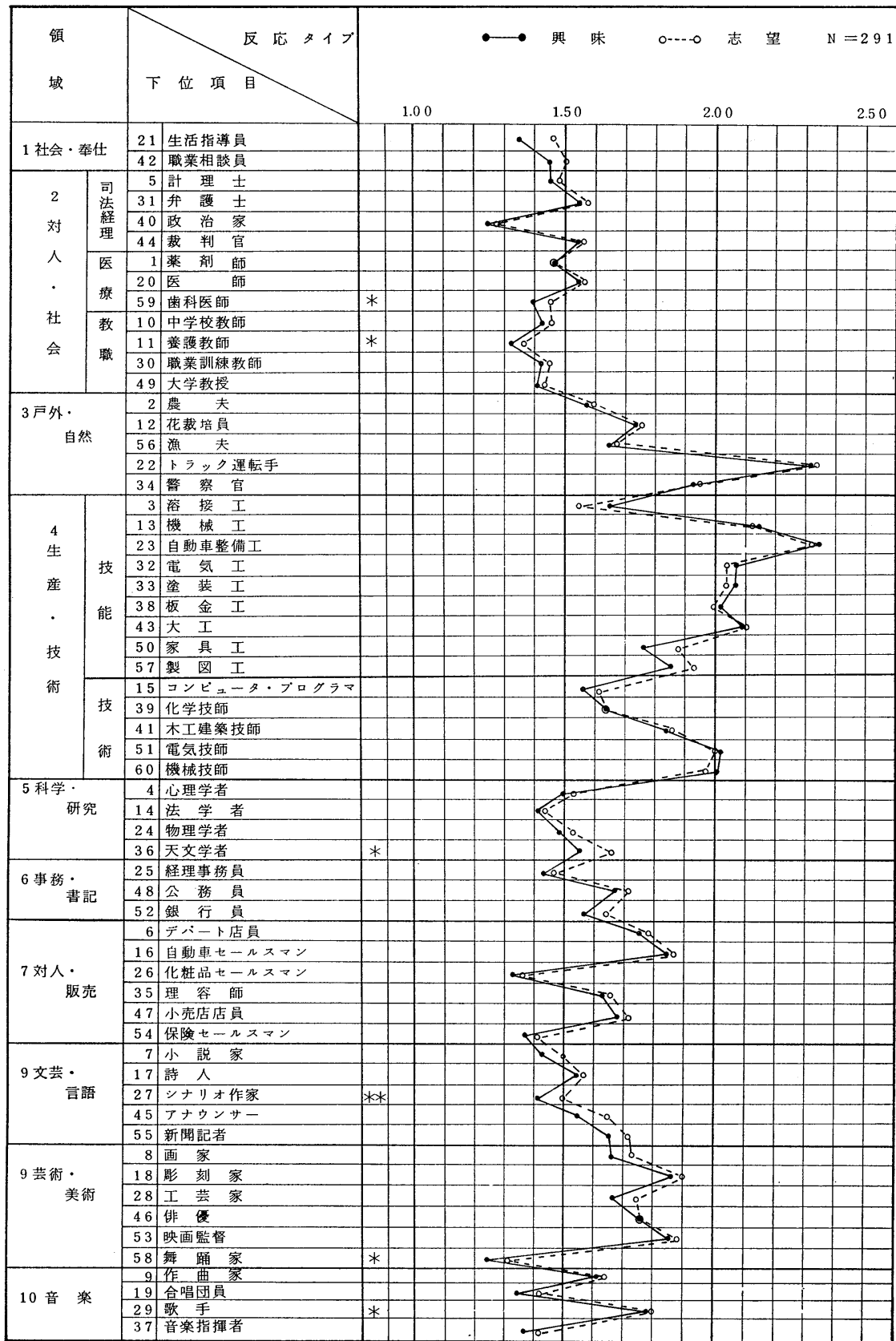
ここで注目したいのは、大学生群と訓練生群とは興味・志望がかなり相異なるけれども、高校生群と訓練生群とはかなり類似した興味、志望の様相を示すことである。

II 職業興味と職業志望との関連検討

(1) 平均値プロフィールによる検討

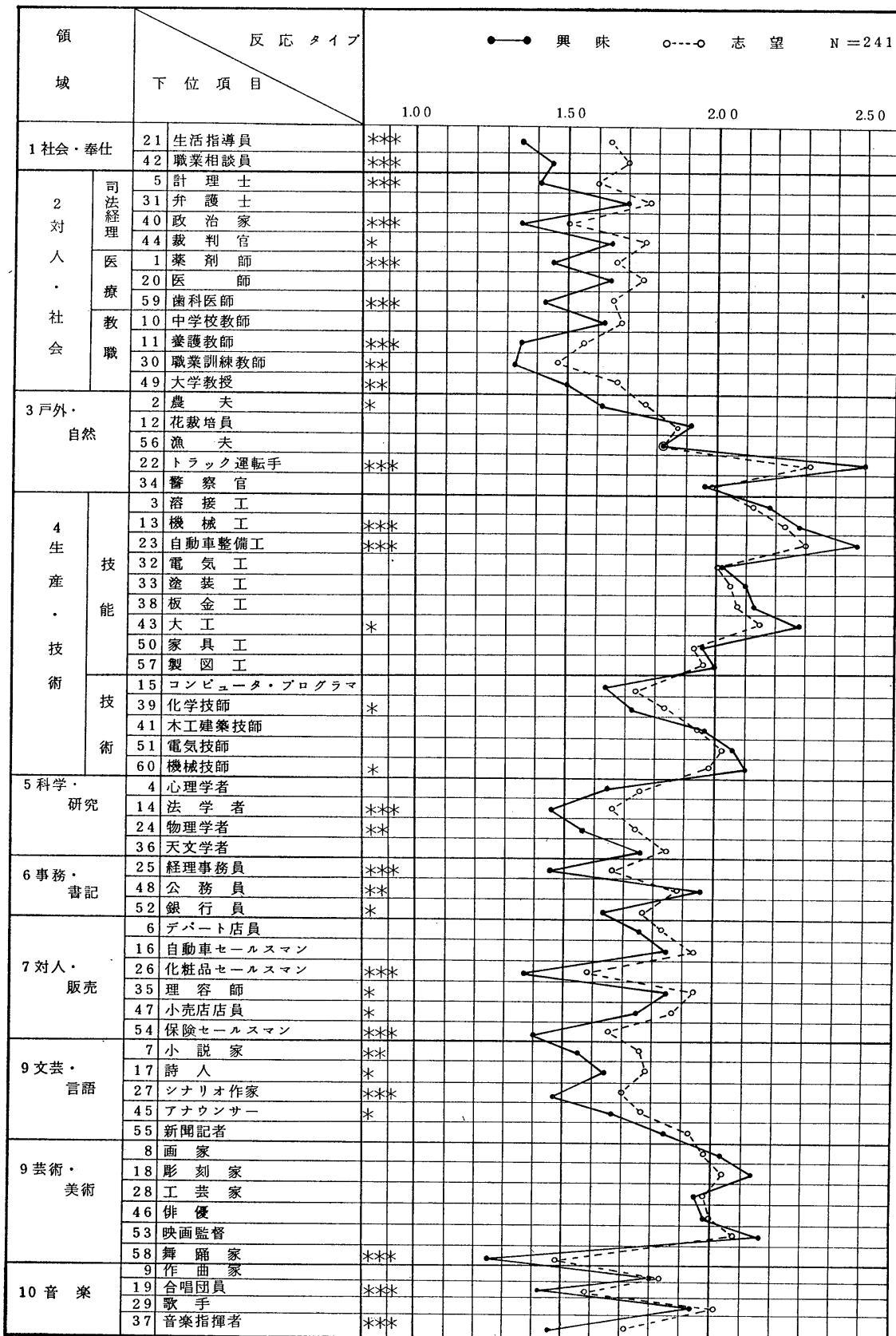
ここでは、各職業名に対する職業興味と職業志望との関連が平均値プロフィールでみた場合、どのようなか、を検討する。

各学年ごとに、興味と志望の平均値をプロフィールで示したのが、図一、図二である。まず、図一をみると、興味と志望との曲線が重なっている。つまり、一年生では興味と志望が分離していない。平均値に有意差がみられる項目



* P>0.05
 ** P>0.01
 *** P>0.001

図1 第1学年の興味と志望との関連プロフィール



* P>0.05
 ** P>0.01
 *** P>0.001

図2 第2学年の興味と志望との関連プロフィール

は、歯科医師・養護教師・天文学者・シナリオ作家・舞踊家の六つの職業名だけであり、その他の職業名では興味と志望との間に有意差は認められない。

また、特長的な傾向として、ほとんどの職業名において、志望の平均値が興味の平均値より大きいにもかかわらず、「生産・技術」の領域に属する、溶接工・自動車整備工・電気工・塗装工・板金工・電気技師・機械技師では、有意差はないけれども、興味の平均値が志望の平均値より大きいのは注目される。

つぎに、図二は二年生群のプロファイルである。これをみると、興味と志望との間にかなり、平均値の差がみられる。しかも、「社会・奉仕」、「社会・対人」、「科学・研究」、「文芸・言語」の専門的な職業水準に属する職業では、職業志望の平均値が興味の平均値よりも大きい。それに対して、訓練内容に関係のある、「生産・技術」領域では、職業興味の平均値が志望の値よりも大きい傾向がみられる。特に、機械工・自動車整備工では○・一％水準で有意差が認められ、明確な差がみられる。つまり、△すき▽であるが、△なりたい▽の割合は低いのである。また、同様な傾向が「戸外・自然」領域のトラック運転手、花栽培員にもみられる。

このように、各職業名に対する職業興味と職業志望との間に一年生群ではほとんど平均値の差が認められなかったが、二年生群になると興味と志望との差が認められることがわかった。

さらに、以上の傾向を吟味するために、職業興味、および職業志望ごとに、一年生群と二年生群との比較をおこなった。

まず、職業興味では、図一、図二にみるように、○・一％水準で平均値間に有意差の認められる項目は次のごとくである。中学校教師・漁夫・トラック運転手・大工・家具工・天文学者・理容師・小説家・画家・彫刻家・工芸

家・俳優・映画監督・作家の一四項目である。そして、その平均値はいずれも、二年生群が一年生群よりわずかに高くなっている。

それに対して、職業志望では、「社会・奉仕」、「対人・社会」、「科学・研究」、「文芸・言語」、「芸術・美術」、「音楽」の各領域に属する職業名では、その平均値が一年生よりも二年生群が高く、その値は〇・一％水準で有意である。ところが、「生産・技能」領域に属する職業名では両学年間に五％水準においてさえ有意差が認められるものはない。しかも、機械工・自動車整備工・電気工・塗装工では、わずかではあるが二年生群の平均値が一年生群の値よりも低くなるという特長がみられる¹⁾。

このように、他の領域では職業志望が学年進行で変化しているのにもかかわらず、既に進路を決定し、訓練を受けている職業名、あるいはその近接の領域の職業名については、学年間に職業志望の変化が認められなかった。

(2) 百分率による検討

前述の興味・志望の平均値の解析だけでは両者間の相違が何を意味しているか、十分に把握できない。そこで、職業名に対する「すき—きらい」反応率、および「なりた—なりたくない」反応率によって、興味と志望との関連を検討する。

職業名六〇項目全体についての反応率をみたのが表2である。職業興味では、「すき」反応率が多く、無反応率がそれに次いで多い。そして、「すき」反応率が少ない。一方、職業志望では無反応率が最も多く、つぎに、「なりたくない」反応率が多く、そして、「なりた—なりたくない」率が最も少ない。このように、項目全体としてみれば、興味と志

表2 興味・志望別の反応率

(%)

区分 学年	職業興味			職業志望		
	すき	無反応	きらい	なりたい	無反応	なりたくない
1年生	15.7	31.5	52.8	9.4	53.5	37.1
2年生	19.0	37.2	43.8	10.2	62.5	27.3

望としては、反応傾向に相違がある。

この傾向が学年進行にともなって、どのように変化するかを検討する。まず、職業興味では△すき▽反応が増加し、逆に、△きらい▽反応が減少する。一方、職業志望では、△なりたい▽反応が増加し、△なりたくない▽反応が減少する。この傾向は、成人になると一層顕著となり、職業興味では、△すき▽が二九・八%、△きらい▽が四〇・八%であり、職業志望では△なりたい▽十三・一%、△なりたくない▽が三三・五%となっている。この傾向から、職業項目全体としてみれば、職業興味の△すき▽反応が年齢とともに増加すると言えよう。一方、職業志望では、△なりたい▽反応は興味と同様に年齢上昇とともに増加し、また、△なりたくない▽反応も増加する。つまり、反応が両極に分かれ、無選択が少なくなるといえる。

つぎに、職業興味領域ごとの興味と志望との関連を、学年進行について検討しよう。

「生産・技術」領域と「対人・社会」領域を例示的に比較したのが表三である。この表にみるように、「生産・技術」領域では百分率の最も高いのが△無反応▽であり、職業志望もほぼ同様である。さらに、その傾向は学年間でもあまり相違が認められない。

それに対して、「対人・社会」領域では、一年生で職業興味の△きらい▽反応が最も多く、志望で△なりたくない▽

表3 学年進行にともなう興味と志望との関連性の変化

領域	反応タイプ	1 学年					2 学年								
		興味	志望	なりたい	きらい	すき	興味	志望	なりたい	きらい	すき				
2. 対人・社会職	司法・総理	44	43.3	6.2	56.0	50.5	15.8	34.4	49.8	7.1	19.5	49.8	3.7	42.7	53.6
	1 薬剤師	5.5	38.1	56.4	5.8	37.5	6.6	34.9	58.5	3.7	59.8	36.5	59.8	34.0	
	20 医師	7.6	39.5	52.9	7.9	41.6	13.3	38.6	48.1	7.1	58.9	34.0	58.9	40.2	
	59 歯科医師	3.1	34.0	62.9	2.8	41.2	2.1	40.3	57.6	2.5	57.3	40.2	57.3	41.9	
	10 中学校教師	7.2	27.5	65.3	5.5	35.7	19.5	22.4	50.1	9.5	48.6	41.9	51.9	46.9	
	11 養護教師	0.7	30.6	68.7	0.7	37.1	2.9	29.5	67.6	1.2	51.9	46.9	41.1	56.4	
	30 職業訓練教師	3.1	37.1	59.8	2.1	43.0	5.8	22.4	71.8	2.5	41.1	56.4	41.1	56.4	
	49 大学教授	6.2	29.6	64.2	4.1	36.1	9.1	32.0	58.9	5.8	55.2	39.0	55.2	39.0	
	3 溶接工	37.5	39.9	22.6	27.8	52.2	36.1	45.6	18.3	21.2	68.5	10.3	68.5	10.3	
	13 機械工	39.5	39.2	21.3	34.4	46.7	42.7	41.9	15.4	20.3	67.6	12.1	67.6	12.1	
4. 生産・技術	23 自動車整備工	52.6	32.0	15.5	49.8	34.4	15.8	59.3	10.8	36.5	57.3	6.2	57.3	6.2	
	32 電気装工	29.9	46.4	23.7	27.5	49.1	29.5	40.1	24.5	16.2	69.7	14.1	69.7	14.1	
	33 塗装金工	32.3	44.7	23.0	26.8	51.9	31.1	47.3	21.6	17.0	71.0	12.0	71.0	12.0	
	38 板金工	23.4	54.3	22.3	22.0	55.7	33.6	47.7	18.7	18.7	70.5	10.8	70.5	10.8	
	43 大家具工	29.5	48.5	22.0	29.0	50.5	43.6	39.4	17.0	25.3	63.9	10.8	63.9	10.8	
	50 家具工	9.6	58.4	32.0	11.0	64.3	22.0	51.0	27.0	7.1	76.8	16.1	76.8	16.1	
	57 製図工	19.6	47.8	32.6	18.9	53.9	27.0	46.1	26.9	13.3	71.0	15.7	71.0	15.7	

(%)

反応が最も多く、両者の傾向は類似している。ところが、二年生では興味で「 \wedge きらい \vee 」反応が最も多いのは一年生と同様であるが、志望において「 \wedge 無反応 \vee 」が最も多い。つまり、職業志望が職業興味と分離して、無反応率が多くなっていると言えよう。

このような傾向は、この二つの領域以外でも認められる。「生産・技術」領域と同じような傾向を示す領域として、「戸外・自然」、「芸術・美術」がある。また、「対人・社会」と同様な傾向を示す領域として、「社会・奉仕」、「科学・研究」、「文芸・言語」、「音楽」がある。さらに、どちらとも判断し難いが後者に近い領域として、「事務・書記」、「対人・販売」がある。

このようなことから、興味と志望との関連をみる場合、「 \wedge すき—きらい \vee 」、あるいは、「 \wedge なりた—なりたくない \vee 」といった両極反応のみをみるのではなく、無選択反応が重要な考察の鍵になるといえる。

(3) クロス分析による検討

以上の検討から、興味と志望とは類似してはいるが、相異なる反応を示すことがわかってきた。そこで、両者をクロスさせて、その傾向を六〇項目全体をまとめてみたのが図三である。

まず、四分割相関係数を求めて、興味と志望との関連をみると、一年生群では $r = 0.9830$ 、二年生群では $r = 0.9943$ であり、興味と志望との相関は極めて高い。つまり、「 \wedge すきでない \vee 」が八・八%、「 \wedge きらいでない \vee 」が三一・六%、「 \wedge きらいでない \vee 」が〇・一%、「 \wedge すきでない \vee 」が〇・一%である。

調査前の推測では、「 \wedge すきだが、なりたくない \vee 」、あるいは「 \wedge きらいだがなりたくない \vee 」という反応で、職業ごとに特

(%)

志望 興味	なりたい	無反応	なりたく ない
すき	8.4	7.2	0.1
無反応	0.9	29.5	1.1
きらい	0.1	16.7	35.9

r = 0.9880

(%)

志望 興味	なりたい	無反応	なりたく ない
すき	9.3	9.6	0.1
無反応	0.8	35.6	0.8
きらい	0.1	17.3	26.5

r = 0.9943

図3-1 <1年生>

図3-2 <2年生>

図3 全項目に対する興味と志望とのクロス集計

長傾向がでるのではないかと考えていたけれども、そのような結果は得られなかった。

つきに、興味と志望との一致度の学年進行にともなう傾向をみる

と、一年生群で七三・一%、二年生群で七一・五%となり、学年進行にともなって、わずかではあるが両者の一致度が減少する傾向がみられる。さらに、成人ではその一致度が五六・六%に減少している。このような傾向は年齢上昇にともなって、特定の職業名にのみ反応を示し、無差別に、どの職業名にも興味・志望の反応を示さなくなるといえよう。

以上、職業興味とその類似概念である、職業志望との関連性を検討した。

四 結果の考察

職業興味と職業志望とが、同一の構造ではないとすると、その相違は何によるものであろうか、若干の考察をする。

第一に、訓練の学年進行にともなって、興味と志望は相異なる変化

をすることについてみると、年齢的発達と職業訓練の経験とが相互関係しているものとみられるが、興味より志望にそれらの要因があらわれやすいと言えよう。

結果Ⅱ―(1)、結果Ⅱ―(2)にみるように、一年生では興味と志望が重っているのが、二年生では分離し、しかも、訓練職種に係る「生産・技術」の領域で、職業志望の方に、学年進行による変化がよく表現されている。これは、訓練をうけることによって、職種の内容を理解し、それによって職業に対する志向を変容させるが、その場合、 \wedge すき―きらい \vee で問うよりも、 \wedge なりたいたい―なりたくない \vee で問うた方が、その志向性がかみやすいものであると言えよう。

第二に、現実的な要件の配慮が興味よりも職業志望にあらわれやすいとも言えよう。

結果Ⅱ―(2)にみるように、全職業名にみるように興味・志望ともに学年進行にともなって両極反応が多くなり、無選択が少なくなる^①。しかし、「生産・技術」領域では、興味で \wedge きらい \vee 反応が多い傾向は学年進行によって変化しないにもかかわらず、職業志望では無選択が多くなる傾向にあることがわかった。

これは、現実をふまえた自己概念が、職業志望にあらわれやすいと解釈できよう^{②③}。

このように、興味と志望との関連を検討し、さらに結果Ⅱ―(3)を考慮すると、前報(一九七七年)に述べたような、「興味が情緒的側面が主となり、職業志望は意欲側面、あるいは価値的側面を含むものである。」という見解には、興味を \wedge すき―きらい \vee として、志望を \wedge なりたいたい―なりたくない \vee という言語表現を用いて設問するだけでは、無理があるといえよう。

また、職業志望は従来から言われている、職業希望(aspiration)とも相異なる概念である。ゆえに、職業志望は興

味とは類似の概念ではあるが、相異なる側面をもち、興味よりも現実的要件の配慮を含む概念あると解釈するのが妥当であろう。

つぎに、訓練校における中退と興味・志望との関係に付言してみたい。

訓練生全体についてみれば、自己の訓練職種と各訓練科ごとの興味・志望は、入すきでないV反応率が高い。例えば、H校一年生では六訓練科のうち、入すきでないVの反応率は八八・〇%から七一・四%に分布している。そして、二年生ではその反応率が八一・八%から二六・一%に分布する。これを別な表現をすれば、約半数の訓練クラスには、自己の職種に対して入きらいでないV者が皆無である。ところが問題になるのは、特定のクラスに、自己の職種に対して入きらいでないVとする者がかなり多い場合があることである。例えば、H校二年生塗装科では三七・五%、C校一年生電気科では四〇・〇%がこの傾向を示している。

このように特定のクラスには、興味をうまく形成させていない事例がある。これがどのような原因によるものか、今後の課題であるが、もし、中退との関連がみいだせれば、訓練生指導の一助となるであろう。

五 要約と今後の課題

職業興味測定法上の問題として、職業興味を入すき—きらいVでとらえ、職業志望を入なりたい—なりたくないVで測定し、その関連性を検討した。特に、本報では、興味・志望ともに下位項目として職業名を用いて、養成訓練課

程に在籍する男子訓練生において、学年進行にともなうて、興味と志望との関連がどのように変化するかを検討した。

その結果、十五歳時の訓練生では興味と志望がほぼ重なっているが、十六歳時の訓練生では両者が分離している。その分離の仕方は「生産・技術」領域では、興味が志望よりも高い。ところが、その他の領域では志望が興味より高くなっていた。

これらの検討により、職業志望は職業興味と類似概念ではあるが、現実的要件が含まれやすい性質をもつと解釈した。

今後の課題としては、対象者を訓練生以外に求めるとともに、年齢層も拡大して興味と志望との関連を検討する必要がある。また、興味と志望との関連のみでなく、その他の個性要因を含めて、広く、パーソナリティ形成とのかわりで考察する必要があると考えている。

本研究をまとめるにあたって、東京学芸大学 藤原喜悦教授、職業訓練大学校 手塚太郎助教授、森和夫講師、当研究センター 香川繁研究員から貴重な助言をいただきましたことを感謝致します。

(注)

(1) 職業訓練法の旧法では、「青少年に対する職業訓練は、特に、その個性に応じ、かつ、その適性を生かすように配慮して行わなければならないものとする」とある。それに対して新法では、「……、職業訓練は、労働者各人の希望・適性・職業経験等の条件に応じつつ……」とあり、希望という言葉がでてきている。

(2) 椋野要(一九七八年)は、興味を吟味する必要性を強調し、次のように定義している。つまり、「ある対象を選択的に注意し、認知するとき、それに対し個人の側に感情的、知的関心がわき、心身の自発的活動をもって集中的に志向す

る傾向がみられる場合興味という。」

- (3) 従来の職業興味検査では「Like-dislike」を日本語におきかえるとき、「好き—嫌い」、「なりた—なりたくない」、
「やりた—やりたくない」等の表現を用いてきた。
- (4) Super (1962) は「興味を」pattern of preferences (likes or dislikes)とみて、ある場合は「preference」と同義語となり、ある場合は「manifested action」を指す。そして「preference」は「that which is preferred (liked better or more)とする。ゆひび」。「aspiration」は「that to which one aspired, that which would like to be」である。「preference」と「aspiration」とは同義語に用いられる例が非常に多いと述べている。
- (5) 希望的選択 (preference) と理想的選択 (aspiration) の比較に関する研究は多いが明確な結論はないようである。
- (6) 個人がいかなる職業興味領域について高い興味を持っているかが分かったとき、その興味領域に対応する職業志望領域について果してどの程度の強さの志望を持っているかを検討し、興味領域の興味の高さと、対応職業志望領域に対する志望とがほぼ対応しているときは、両者の間にバランスがとれているということになる。
- (7) 「好きな職業の中でつきたいと考えているのは、男子で七八・五%、女子で八五・三%である。」と報告している。
- (8) 検査の標準化作業から抽出したデータであり、高校生群は普通課程・工業課程・商業課程を含むが、それぞれの課程ことの検討は試みていない。
- (9) 単一の職業名について反応を求めているゆえに、厳密には「expressed interest」である。Slaney (1978), Borgen, & Selig (1978) がおこなったように、「expressed interest」と「inventoried interest」との検討を別の機会におこなわねばならぬ。
- (10) Sinnott (1956) は、「人々は、若い頃には、仕事の世界の中の、複雑な職業の性質より、複雑でない職業の性質を理解している。」「牧師・セールスマン・技能的職業は、人々が覚える最初の職業で、社会福祉とか科学にたずさわる職業は、後の方で覚える職業である。」
- (11) 同様の傾向が、「対人・販売」領域のパート店員・自動車セールスマン、また、「技術」領域の電気技師・機械技師、さらに「戸外・自然」領域のトラック運転手、警察官において、5%水準で平均値に両学年間の差が認められる。
- (12) 無反応という用語を使ったのは、「好き—嫌い」、あるいは「なりた—なりたくない」を強制二者択一に選択させた

- のではなく、すきでもきらいでもない場合はなんの印をつける必要もない、として回答を求めたからである。
- (13) きらいな項目を多く選択する者と、逆にすきな項目を多く選択する者とがあり、選択の個人差がある。ただし、Tyler (1955)によれば、低学年では「はい」とする答が多く、高学年にすすむと「いいえ」とする答が多くなる。子供の段階では、否定的であるよりは、はるかに肯定的な一般的態度でもって、環境に反応していくと述べている。
- (14) 児玉省(一九六一年)の報告では、「中学から高校にかけて、一般的には、好きの項目もきらいな項目もいずれも増加し、どちらでもないが減少する。中学期で未決定的であった態度や興味が減少して、明確化してくる。」としている。
- (15) Crites (1969)は、「現実考慮の大きな力として、人は選択を変えるか、無選択(no choice)の状態に戻るかする。」と指摘している。
- (16) Crites (1969)は、「人は年齢が高くなるにつれて、彼の選択や好みはますます現実に基づいたものになり、彼に適しそうな職業の選択肢の数が少なくなる。排他過程は、かなり進行していて、選択の範囲は急速に狭められていく。」と述べている。
- (17) 森光雄は Ginzberg の見解をかりて次のような定義をしている。「進路の選択に「好きな仕事」とか、「望ましい仕事」という基準で職業を選ぶとき、そのような選択の仕方は希望的選択 (Preference) という。希望的選択の基準はほとんど興味 (interest) に基づいている。〈choice〉は〈preference〉よりも現実的諸条件に妥協的な選択である。〈aspiration〉は、あらゆる現実の条件を超越して自己の抱負を語るとき、夢や憧れのような空想的なものから、社会の進展や人類の幸福を願う高邁な理想にいたるまでの多様な選択をするが、それは自我の威信に関係したものを投写する。」

参考文献

- Borgen, F. H., Selings, M. J. 1978 Expressed and inventoried interests revisited: perspicacity in the person. *Journal of counseling psychology*, 25, 536—543.
- Crites, J. O. 1959 *Vocational psychology*. McGraw-Hill book company.
- Nelson, A. G. 1956 Vocational maturity and client satisfaction. *Journal of counseling psychology*, 3, 254—256.
- O'hara, R. P., Tiedeman, D. V. 1959 Vocational self-concept in adolescence, 6, 292—301.

- Super, D. E. 1953 A theory of vocational development. *American psychologist*, 8, 185—190.
- Super, D. E., Overstreet, P. L. 1960 The vocational maturity of ninth grade boys. Teachers college bureau of publications.
- Sinnott, E. R. 1956 Some determinants of agreement between measured and expressed interests. *Educational and psychological measurement*, 16, 110—118.
- Slaney, R. B. 1978 Expressed and inventoried vocational interests: a comparison of instruments. *Journal of counseling psychology*, 25, 520—529.
- Tyler, L. E. 1955 The development of "vocational interests." *Journal of genetic psychology*, 86, 34—44.
- Van de Castle, R. L. 1962 Perceptual immaturity and acquiescence. *Journal of counseling psychology*, 9, 167—171.
- 藤原喜悦・河井芳文・戸田勝也 1977 職業興味・志望診断検査手引 図書文化協会。
- 藤原喜悦 1978 職業興味の発達 教育相談研究 第十一号 六〇—七〇ページ。
- 広井甫 1969 進路指導のための心理検査シンポジウム報告書 日本職業指導協会 五四—六〇ページ、一一二—一二〇ページ。
- 倉橋靖典 1978 最近の新規中卒訓練生における長欠・中退 技能と技術 第六号 八〇—九〇ページ。
- 椋野要 1978 興味の心理学 教育相談研究 第十一号 一〇—一五ページ。
- 松本公子 1976 進路指導における職業的成熟指標に関する研究 関東地区教育研究所連盟研究発表大会資料。
- スパー・D・E 1962 職業的発達の理論 職業指導研究セミナー報告書 日本職業指導協会。
- 職業研究所 1972 職業的発達の概念と測定 職研資料シリーズ II—6。
- 戸田勝也 1973 中退に関する調査研究 職業訓練大学校調査研究資料 第九号。
- 戸田勝也 1974 公共職業訓練における中退に関する研究 職業訓練大学校調査研究報告書 第三七号。
- 戸田勝也 1975 職業訓練校中退と職業興味との関連 職業研究 十一月号。
- 戸田勝也 1977 職業訓練過程における職業興味の安定性 職業訓練研究 第一卷 九九—一二〇ページ。
- 戸田勝也 1977 職業興味構造に関する研究の展望 日本大学心理学研究 第三号 三六—四五ページ。
- 戸田勝也 1978 職業興味の階層構造 教育相談研究 第十一号 十一—十五ページ。

戸田勝也 1978 職業興味と職業志望との関連性 日本応用心理学会第四十五回大会論文集 八九ページ。

(とだ かつや 職業訓練研究センター 訓練適応研究室)